



ホッキョクグマ 生態と行動の完全ガイド
 Andrew E. Derocher, Wayne Lynch/Polar Bears
 坪田敏男・山中淳史 監訳

2014年10月・東京大学出版会
 定価 10,368円(本体 9,600円+税)

評者 酪農学園大学教授 浅川満彦

原書は2012年、米国ジョンス・ホプキンス大学出版から刊行された『Polar Bears: A Complete Guide to Their Biology and Behavior』で、監訳者の2名含む日本を代表するクマ類研究者5名が翻訳した(以下、本書)。原著著者の専門を知るには、参考文献(p259~271)を一覧するのが鉄則である。デロシェール教授(アルバータ大学生物科学部)筆頭の数多原著・総説の題名をキーワード的に記載順に列挙すると性的二型、血中尿素・クレアチニン濃度、幼獣発声、地理的分布、共食い現象、食性、行動特性、乳組成、油汚染による影響、繁殖生理学、幼若個体生存、養子関係、発育、狩猟圧および気候変動との関連性など、ホッキョクグマを様々な切り口で論文を書かれていた。刊行は1990年から2010年なので、わずか20年ほどでモノにしていたことになる。もちろん、連絡著者としての論文も多数あるので、後進への研究教育にも力を注いでいることが推し量られた。今、この瞬間に活躍する国外の野生動物学の研究者には、極東小島の者には想像もできないような桁外れの巨人がいることをまざまざと知らしめた。それだけでも本書の価値はある。さて、本書は次のような14の章構成となっている。魅力的な海のクマ、ホッキョクグマという動物、進化、ヒトとの関わり、北極の海洋生態系、海水と生息環境、餌動物、分布と個体群、狩りの方法、行動、巣穴での生態、生活史、脅威、ホッキョクグマの未来。本文のほかに、コラムに相当する「BOX」が随所に添付され、知的関心を高める仕組みとなっている。

本書は2つの異なった性質が同居している。1つは、野生ホッキョクグマの最新生物科学研究を解説した書で、「ガイド」というカテゴリーを大いに超えている。ただし、記載は評者のような不親切な一般書に仕上げる不心得者は参考すべきであるが、退屈にはならないよう、一般書のように記述されていた。このホッキョクグマが北極における食物網の頂点に位置する種であるため、結果的に同地域の生態系を把握するための基本文献としても兼ねる。さらに、ヒグマ(本書ではグリズリーと記された)とホッキョクグマとは系統的に近縁であるがため、その比較から、ヒグマ研究を行う上でも第一級の資料となっている。惜しむらくは、これら両種の比較図(たとえば、体部比較であれば四肢長短が判る全体的シルエット、後脚長毛の状態、背部盛り上がり、頭骨であれば臼歯の形態など)があれば、もし、フィールドでアルピノ・ヒグマに遭遇した時に、楽しく識別できよう(もっとも、事故に近い不意なる遭遇は除くであるが)。

獣医学に密接に関わる部分は、感染症などの疾病を扱った「生活史」の章である。この章にはBOX「寄生虫」とBOX「病気」が付随した(それぞれ、p217とp219にて掲載され、嬉しいことに「寄生虫」の方は丸々1頁が充当されている)。ヒグマ(グ

リズリー)は様々な内外寄生虫の宿主で、評者も、ごく最近、この種(北海道産個体)から、種としては初めてマレー鉤虫を見出した。このように、今後も新記録が続くであろうが、ホッキョクグマでは蠕虫の記録が少ない。BOXで指摘したように「海水へとその生息場所を移したときに、これらの寄生虫を陸に置き去りにした」のかも知れないが、そもそも検査をする機会が少ないという研究バイアスも無視できないのではないかと。また、本書のいくつかの場で指摘しているように、宿主ホッキョクグマの個体群減少と生息域の分断化が著しいので、特有蠕虫の絶滅もあろう。いずれにせよ、その検証作業は急いだ方が望ましい。もっとも、そのためだけに殺戮するのは、絶対に、宜しくないことは、寄生虫屋の評者すら判る。あくまでも死体の有効利用という意味なので、落ち着いて欲しい。さて、そのBOXでは、旋毛虫 *Trichinella nativa* とトキソプラズマ *Toxoplasma gondii* 感染について取り上げていた。実に面白い!そこで、深く調べようとしたが、本文に文献の引用明示が無い!一般書を目指すため、敢えて、煩わしい引用文献明示を避けたのであろう。が、再考が必要だろう(後述)。そのようなことからか、引用文献表は各章ごとにまとめられていた。実は冒頭で言及した筆頭原著調べでも苦慮したのだが、どうしても重複文献が出るので無駄。結局、論文の引用文献表にあった各題名を手がかりに、孫引きはできたが、時間がかかる。本書は一般書の体を装いつつ、ホッキョクグマ全般に関する生物学書としても見なされるはずである。著者のポテンシャルの高さは前述した通り。したがって、この引用法は通常の科学論文のような形式に準ずることを希求する。もう一点、原書あるいは本書どちらに起因するのかわからないが、BOX「病気」冒頭で(実によく目にするが)疾病と病原体とを混同した記載は不適切である。多くの学生も読者として想定されるので配慮すべきである。疾病はコト、病原体はモノ、全く異なる概念なので留意して欲しい。

本書のもう1つの性質がホッキョクグマ写真集である。写真が極めて豊富なのだが、厳しいことを言うようだが諄い程類似写真が多い。でも、こういったものは無駄か。断じて否。要するに、本書のもう1つの目的がアートとしての作品集で、どうぞ心行くまで堪能して欲しいという目論見である。動物園では超人気の飼育種で、しかも、その幼獣の写真がベストセラーになる程の種である。写真が、実に素晴らしい。母親に寄り添う兄弟姉妹の姿は、ささくれ立った日々の疲れを確実に癒すだろうし、雄々しい成獣の姿は、極北の息吹を感じ取ることができた。卓越したこの写真家はほかにもフクロウ類のものもあるようなので、是非とも、入手したいという気にさせた。

以上のように、本書は知られざる種ホッキョクグマおよび北極生態系に関する科学書と野生動物界のアイドルホッキョクグマの写真集とが同一書となっていた。気軽に購入できうる価格設定ではないし、ガイド本という言葉に誘われたものの極北のフィールドで、常時、持ち歩くには難儀をするはずである。が、公共図書館は言うに及ばず、動物を掲げる大学研究室や動物園水族館の科学館などでは、間違い無く装備すべき図書である。

問合せ: 一般財団法人東京大学出版会 Tel 03-6407-1069